
帰去来

シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰去来

【Nコード】

N5935Z

【作者名】

シン

【あらすじ】

ハロウィンの日、学生時代から嫌いだった厭な男、ビルから『失恋した』という電話がかかって来た。

彼は酒を煽り、時には涙を零しながら、その失恋話を延々と続ける。カボチャや魔女が犇めき合い、お菓子が山と積まれる部屋で。

ハロウィンの今日、ビルはその子と逢う約束をしていたのだ。それなのに、その子は来なかった。

だけどぼくは、ビルの失恋話を笑う気には、なれなかった。
なぜなら……。

失恋？

学生時代から、厭な奴だった。

愛称、ビルは、^{レップスクール}ニユー・イングランド地方の名家の御曹司で、^{アイビーリーグ}名門私立高校から東部名門八大学の一校に進学した真正正銘のヤツピ
ーで、地域社会で敬われていた彼は、自らがこの国を動かしている
とさえ思っていたのだ。

^{ワスプ}WASP（White・Anglo・Saxson・Prote
stant）と呼ばれる彼のような一部の白人が全てそうだ、とい
う訳ではないが、好んで付き合いたい、と思える人種では、なかっ
た。

傲慢で、厭味で、貧乏人など見下し、そのくせ、^{ほごい}施しだけはきつ
ちりと与える。

教会にも通っている。

そついう名家の御曹司としてのスタイルが、彼には生まれながら
に染み付いていたのだ。

アメリカの多くの地方では、彼のような名家の御曹司が実力者と
して慕われるが、このニユーヨークではそうは行かない。ここでは、
本物の実力者でなければ、相手にされないのだ。

だが、まずいことに、アイビー・リーグで四年間の学部を終了し、
大学院で修士号^{マスター}まで得た彼は、その本物の実力さえ持ち合わせてい
た。

ニユーヨークで成功したのだ。

それでも、彼を慕う者はいなかった。

結果、彼は、故郷での人々に敬われる生活を望み、地元から自分
の言うことを利くイエス・マンを呼び集めた。その取り巻きたちを
側に置き、我が物顔で振る舞い始めたのだ。

今では、彼のことを「ビル」と親しみを込めて呼ぶ人間は、その
取り巻きたちだけになっている。他の者は、彼の正式名、ウィリア

ムで呼び　いや、そのファースト・ネームで呼ばれている分には、まだいい。厭味のセンスを持つ人間なら、彼のラスト・ネームにサ－の称号をつけて呼ぶだろう。もちろん、彼がその称号に相応しい人間だ、という意味ではなく、全く別の意味で。

ぼくは、彼をビルと呼ぶ取り巻きの一人だった。

従兄弟である、といえば、まだ体裁がいいが、実際には、大学へ行くために彼の父親に資金を援助してもらった、という、一歩下がらざるを得ない立場である。

ビルもぼくも、互いに今年、三十歳になる。

そんな折り、ビルから一本の電話がかかって来た。　いや、その話をする前に、彼のここ二月間の様子を付け加えて置かなければならないだろう。

失恋？

ビルは、この二月近くの間、屋敷に取り巻きたちを呼び付けることもなく、仕事が終わればすぐにイースト・サイドに構える豪勢な屋敷に戻り、どこにも出歩くことはなかったのだ。

そして、十月三十一日の今日、彼は浴びるほどに酒を飲み、強かに酔った口調で、ぼくに電話をかけて来た。

「失恋したんだ……。すぐに来てくれないか」

行きたくなど、なかった。ハロウインの今日、ぼくは近所の子供たちにお菓子をあげることを楽しみにしていたのだ。いや、その後、子供たちに冷やかされながら、彼女と食事に行くことを。

だが、従兄弟ということもあり、彼の父親に恩もあり、加えて、イエスとしか言えない立場の人間であつたため、ぼくは渋々、彼の屋敷へと足を運んだ。

失恋していい気味だ、と思うよりも、彼に恋人がいた、ということの方が驚きだった。彼のような傲慢な人間に、どこの誰が付き合っていたのだ、と思つたのだ。

だが、別にそれを聞きたいとは思っていなかった。少なくとも、今日は。

ぼくがビルの屋敷に着いたのは、それから三〇分後のことだった。この狭いマンハッタンで、庭までついている立派な屋敷である。

ビルは、庭に面した大きな窓のある部屋の片隅で、蹲つまずくまるように、ウイスキーを煽ふっていた。

部屋には、甘い匂いが充満している。香水、とかそんな気の利いたものの匂いではない。キャンディやチョコレート、クッキー、ケーキ……。そんなお菓子の群れの、甘ったるい匂いである。

これから一〇〇人の子供がお菓子をねだりに来るのか、と思えるほどのお菓子の山は、そこら中に飾りつけられたカボチャや魔女の装飾と共に、賑やかな一日を演出している。

だが、その広い部屋の片隅で酒を煽るビルの姿は、空しい、とは言えないものであつただろう。

ぼくはとにかく窓へと向かい、酔いそうになるほどの匂いから逃れるために、大きく窓を開け放った。何しろ、甘ったるいお菓子の匂いと、ビルの煽る酒の匂いがごちゃまぜになっているのだから、気分が悪いこと、この上ない。

庭には、いつもガレージに入れてあるはずの、黒塗りの高級車が出してあつた。誰かに磨かせておいたのか、いつも以上にピカピカである。きつと、恋人と出掛けるために用意していたのだろう。

ぼくは、ビルの前に身を屈め、時計を気にする素振りを見せながら、来たことだけを彼に告げた。

失恋？

「可愛い子だったんだ」

ビルは言った。

酒のせいだけでなく、目が赤い。

「庭に車が出てあるだろう？ おれは今日、その車にあの子を乗せてやるつもりだったんだ」

そう言つて、ビルは、グイ、っとウイスキーを飲み干し、また、グラスの中へと注ぎながら、取り憑かれたように喋り始めた。

「おれは小さい頃から恵まれていて、一流の生活、一流の教育、一流の身のこなし……何でも不自由なく持っていた。あの車もそうだ。九月の始めに買い替えたばかりなんだよ。知ってるだろ？ 前の車も悪くなかったが、今の車の方がずっと気に入っている。その車に、汚い手で触ろうとしているガキがいたんだ。まだ買い替えたばかりの頃だよ。おれは、仕事の付き合いもあつて、鑑^みたくもない個展に連れ出されていた。それでも、買ったばかりのあの車に乗って出掛けることができて、ちよつと気分が良くなっていたんだ。だが、その気分の良さも、その薄汚いガキのせいで吹き飛んだ。おれはすぐに、

『何をしているんだっ！』

つて、そのガキを怒鳴りつけてやったよ。まだ小さい子供なんだ。近くで見ると、思っていたよりもずつと小さくて、何もそんなデカイ声で怒鳴ることはなかったな、って、後悔したんだ。だけど、前にも車に傷をつけられたことがあったから、おれも甘い顔はしなくて。覚えているだろう？ 白のベンツに乗っていた時だ」

「ああ」

ぼくが応えると、ビルはまたウイスキーを、グイ、っと煽り、息苦しそうに噎せ返った。

多分、ぼくが腕の時計を垣間見たことにも気づいていなかっただ

ろっ。

「おれは、そのガキもてつきり車にイタズラをしに来たんだと思って、優しい言葉で追い払うこともせず、思いつきつい視線で睨みつけてやったんだ。小さな子供といつても、この街じゃあ、そんな子供がマリファナやコカインをやってることなんて珍しくもないからな。　　だけど、そのガキは、おれが睨みつけるのを見ても逃げもせず、へへエ、と頭を掻いて笑ったんだ。こいつは脳みそが足りないんじゃないか、って思ったよ。おれが子供の頃なんか、大人の上から睨みつけられたら、怖くなって走って逃げたさ。最近のガキは、そんなことじゃ逃げないんだ。それどころか、

『このくるま、ぴかぴかだね。すごくきれいだね』

って、でっかい目をキラキラさせて言うんだ。ハッ、とするほどに可愛い顔をしてさ。アクアマリン、ってあるだろ？　その宝石みたいにきれいなブルーの瞳で、髪は眩しいくらいの赤毛で。　　あ、この子はきっと、大きくなったら金髪になるんだろうな、って思ったよ」

　　そこまで言って、ビルは思い出すように瞳を閉じ、しばらく自分の時間に浸っていた。

失恋？

ぼくは、といえば、帰ってしまう訳にも行かず、仕方なく冷蔵庫から氷を取り出し、水割りを作って飲み始めた。話がすぐには終わりそうにない、と諦めたのだ。

「そのガキはさア……」

と、ビルがまた話を始める。

「そのガキは、とんでもない馬鹿なんだよ。人に怒られてる、ってことが解っていないんだ。普通なら、車の持ち主が戻って来た地点で、ああ、自分はもうこの車から離れなくちゃならないんだな、って判断するだろ？　だけど、そのガキは離れないんだ。汚い手でベタベタ触ろうものなら、また怒鳴りつけて追い払ってやろうと思っただけ、触りもせず、ただ眺めているだけなんだ。で、おれも無下に追い払うことも出来なくて、さっき怒鳴りつけたことも、何だか酷く悪いことをしたような気がして　いや、本当は悪いなんてこれっぽっちも思っていないかったかも知れないけど、とにかく、おれが悪者になるのは厭だったから、

『車が好きなのか？』

って、聞きたくもないことを訊いてやったんだよ。そうしたら、とびきりの笑顔でうなずくんだ。でも、その後すぐに、照れるようにはに cand、本当は、こんな凄い車を見るのは初めてで、珍しく見ていた、って言うんだ。そんなこと言われなくても、おれには最初から解っていたさ。薄汚れた、見窄らしい浮浪児みたいなガキが、黒塗りの高級車になんか乗ったことがあるはずないんだからさ。もちろん、近くで見たことだってないだろう。おれは心の底から、そのガキを馬鹿にしたよ。バワリーにいる貧困層の白人の子だろうと。このまま大きくなったって、学校にも行かず、ドラッグに溺れて、ギャングか麻薬中毒者になるだけの子供なんだ。人間のクズだよ」

吐き捨てるように言っておきながら、ビルはこぶしが白くなる
ほどに、きつく指を結んでいた。

失恋？

いつになったら本題に入るのだろう、と、ぼくは時計を気にしていたが、ビルはそんなことなどお構いなしで、話を続ける。

「おれは、一向に車の側から離れないガキに、いい加減、腹が立つて来てさ。車のことを褒めてもらった、っていつても、そんなガキに褒められたって嬉しくもないだろう？　だから、

『年はいくつなんだ？　家に帰らなきゃ両親が心配するだろう』

って訊いてやったんだ。もちろん、心配してくれるような良い両親がいるなんて思っていなかったさ。応えられないことを訊いてやれば、そのガキもきつと帰るだろう、と思っただんだ。そうしたら、そのガキも寂しそうな顔をして、それでも一応、笑って、やっと車の側から立ち上がったんだ。その時、初めて靴が見えたよ。サイズの合っていない汚い靴なんだ。きつとどこかで拾って来た靴なんだよ。だからおれは、そのガキはおれに金をねだるつもりで、車の側で待っていたんだ、って思っただんだ。

『ギブ・ミー・ニツケル（５¢（ニツケル）ちょうだい）』　ってさ。よくいるだろ？　でも、そのガキは金をねだらずに、

『五つ』

とだけ応えたんだ。だけど、立ててる指は四本で。どうやら、この間、五つになったばかりらしくて、指の本数を間違えているんだ。そのガキはまた頭を掻いて、恥ずかしそうに笑って、すぐに五本目の指を立てたよ。本当に馬鹿なガキなんだ。数もロクに数えられないんだぜ。だから、おれは言っちゃったよ。

『おまえがこの車を買うには、少なくとも後一万年はかかるな』

って。普通なら、小さいガキにそんなことなんか言わないだろ？　言っても、冗談めかして言うだけだ。でも、おれは言ったよ。それでも言わなけりゃ解らない阿呆だったんだ」

このままいつまで付き合わされるんだろう、と思いつながら、ぼく

はもう時計を見ることもせず、彼女との約束の時間まで、ビルの話に付き合つことにした。

失恋？

「おれがそう言ったら、そのガキはどうしたと思う？　また照れるように笑ったんだ。人の厭味なんて、全く堪えていないんだよ。だから、おれもそれ以上付き合ってる気もしなくて、車に乗ることにしたんだ。でも、運転席のドアのところにそのガキがいてさ。」

『危ないから退いてろ』

って言って、そのガキを脇へ下がらせたんだ。ちよつと押して下がらせただけなんだぜ。

いや、面倒臭くて、少し力が入っていたかも知れないけど。そのガキが、コテン、と転んだんだ。呆気ないほど、簡単に。押した時に判ったんだけど、惨めなくらいに痩せてるんだよ。ロクなものを食べていないんだ。悪いことをしたな、って思ったよ。そのガキが自分から車の側を離れるまで待つててやれば良かった、って。そう思ったけど、それ以上に、そんな小さい子供を突き飛ばしたことに焦って。他人の目を気にしていたんだ。そのガキが泣き出さなくて良かった、とか、すぐ近くに人がいなくて良かった、とか思っ、ホッとしたんだ。それで、人が来ない内に、そのガキに手を貸して起こしてやって。そうしたら、

『ころんじやった』

って、まるで自分の失敗みたいに、恥ずかしそうに言うんだ。おれが突き飛ばしたせいで転んだ、っていうのにさ。おれ……自分が恥ずかしかったよ。だから、

『家の人が心配しないのなら、何か食べてから帰るかい？』

って訊いてやったんだ。いや、それもいつも通りの貧困者への施しのつもりだったかも知れない。それに、そのガキは気づいていなかったけど、ヒジから血が出ていたんだ。転んだ時に怪我をしたんだよ。でも、そのガキは泣いていなくてさ。痛いとも言わないんだ。おれは心の中で、こいつは真正正銘の馬鹿だから神経も通ってないんだな、って思ったけど、そのガキを不憫に思っているおれ

もいて、そのガキが、コクン、とうなずいたから、何か食べさせてやることにしたんだ。でも、その汚いガキを連れてレストランに入る気がしなくてさ。ホットドック・スタンドで、ホットドックとジュースを買ってやったんだ。もちろん、ヒジの傷もハンカチを濡らしてきれいにしてやった。ドラッグ・ストアで絆創膏を買って、その傷口に貼ってやったんだ。そのガキが家に帰って、おれに怪我をさせられた、って言ったら厭だろ？ 本当は、そんなことを親に言い付けるようなガキじゃないんだけど、おれは貧乏人はみんな小賢しいと思っていたからさ。そいつが、そんなことを考える腦のない馬鹿なガキでも、親に言い付けられないように、って文句のつけようがないくらい親切にしてやったんだ。そして……その子がホットドックを食べている間において帰った。もちろん、

『もう帰るから、後は一人で大丈夫だね？』

と訊いてやったさ。そのガキも、

『うん』

とうなずいた。だから家に帰ったんだ。それで――

そこまで言って、ビルは涙を堪えるように、唇を結んだ。

ぼくにも、彼が泣くまいとしていることが判ったので、少し一人にしてやるう、と思つて、冷蔵庫に氷を取りに行つた。

失恋？

カラン、カラン、と氷を入れる音を立てると、背中の方から、ズツ、と鼻を嚙り上げる音が聞こえて来た。

ビルの方もストレートでは体に悪いだろう、と思ったけど、無理に水割りに変えさせようとは思わなかった。今の彼には酒が必要なのだ。といっても、肝心の失恋の話は、まだ聞いていないけど。

「次の日、またそのガキに逢ったんだよ」

ぼくが戻ると、ビルは赤い目を隠すようにしながら、そう言った。「おれの家の前で、キョロキョロしてるんだ。マズイことをしたな、って思ったよ。昨日親切にしてやったから、味をしめてまたタカリに来たんだ、と思ってさ。早くどこかへ行ってくれないかな、って思いながら、ブラインドの隙間から覗いていたんだ。でも、一向に帰る様子がなくてさ。三時間も同じ場所を行ったり来たりしているんだ。時々、門の前で立ち止まっては、自分の手のひらを眺めたりしてさ」

「手のひら？」

ぼくは、初めてビルの言葉に問い返した。

「ああ。いや、本当は手のひらじゃないんだ。その小さい手に何かをもっているんだよ。後で判ったんだけど、それはおれの免許証でさ。それを届けに来てくれたんだ。それなのにおれは、そんな小さい子を三時間も外に放っておいて、早くいなくなつて欲しい、ってブラインドの陰から眺めていたんだ。やっと家に入れてやったのは、あんまり腹が立って、追い払ってやろうと思った時さ。ズンズンと足を踏み鳴らして、思いつきり目を吊り上げて外に出て行ったんだ。そうしたら、そのガキは嬉しそうにおれを見上げて、

『これ』

って、その免許証を差し出して言うんだ。あの車を運転するのに必要なものだ、って解ってるんだよ。いや、ホットドック・スタンドのおやじからそう聞いた、と言っていた。あのガキは字が読めないんだよ。まあ、まだ五つだからな。それで、そのおやじに読んでもらって、あの脳みその足りない馬鹿な頭で、おれの家住所を一生懸命、覚えたんだ。きっと、あいつの頭だから、何回も繰り返し聞かなきゃ、ここの住所なんか覚えられなかったはずなんだ。字が読めないんだから、頭で覚えるしかないだろ？ あのガキも偉いが、あのガキに繰り返し住所を読んでやったホットドック・スタンドのおやじも偉いよ。そう思うだろ？ とにかくおれは、免許証を受け取って、そのままガキを帰す訳にも行かなくて、家に入れたってやっただ。

失恋？

『ジューズでも飲むか？』

ってな。何しろ、三時間も待つていたんだからな。あのガキも一言声をかければいいのに、黙ってうるついているものだから、おれだつて何の用があるのか判らなかつたんだ。でも、考えてみれば、門についているインターホンは、あの子の身長じゃ届かないんだよ。ドアをノックして声をかけるには、門をくぐらなきゃいけない。あの子はずっと、それで悩んでいたんだ。あのちっこい脳みそで。おれは何だかその子のことが無償に愛らしくなって、ジューズだけじゃなく、クッキーやチョコレートも出してやつたんだ。来客用の高いやつだよ。あの子は瞬きすら忘れてそれを見ていたさ。おれがお菓子を出してやるまでの間も、キョロキョロと部屋の中を見回して、

『すごいおうちだね。これ、ぜんぶ、ひとつのおうちなの？』

って、何度も訊くんだ。それから、自分の汚い服と見比べて、恥ずかしそうにうつむいてさ。解ってるんだよ。自分が貧乏人で、こんな家には相応しくない人間なんだつてことが。あの子は、おれが思ってるほど、馬鹿な子供じゃなかつたんだ。身分違いを思い知らされた上に、きれいなグラスに入ったジューズや、ピカピカの皿に並べられた高級なクッキーやチョコレートが出て来たものだから、どうしていいのか解らなくなつてたんだよ。その様子を見ながら、おれが何を考えていたか解るか？ おれは貧乏人の子に生まれなくて良かった、って考えてたんだよ。だって、そうだろ？ 他人の家に招かれて、マナーも知らないじゃ、恥をかくだけだ。けど、貧乏人の子に生まれたら、こんな家に招待される機会もないんだよな。何が恥なのかも、きつと一生知らないままなんだ。その子も、目の前に並ぶジューズやお菓子を見て、これ食べてもいいのかな、って顔で、悩んでるんだ。おれとお菓子を交互に見つめてさ。

おれが一つづなずいてやると、その子は両手でお菓子をつかんで食べ始めたよ。ジューズは手を使わないんだ。ストローが差してあったからさ。クッキーを食べては、そのストローのところまで口を持って行って、吸い付くんだ。口の中のお菓子をまだ全部飲み込んでもないのに、両手にはもう次のお菓子を持っている。あんまり浅ましくて、みつともなくて、惨めで、汚くて、下品で……いつもなら眉を顰めるんだけど、おれ……その子が可哀想で、可哀想で……顔を背けることしか出来なかったんだ。可愛い子なんだよ。素直で優しく……。それなのに、何でそんな汚い格好をして、おなかを空かせてなきやならないんだ、って……。おれ、その子にもっと何かをしてやりたくなって……」

ここで、ぼくもビルから視線を逸らすことになった。ビルの目から、ぼろぼろと大きな涙が零れたのだ。

もちろん、ビルが、その子のことを、ガキと呼ばなくなったことにも気づいていた。

失恋？

「おれ……昨日、その子に貼ってやった絆創膏が汚れているのを見て、新しいのに替えてやらなきゃ、って思ってたんだ。信じられるか？ その子の母親だって、その絆創膏には気づいたはずなんだ。それなのに、絆創膏を替えてやってもないんだよ。普通、風呂に入ったら駄目になるだろう？ 風呂に入れてもらっていないんだよ。だからおれは、その子を風呂に入れてやろうと思って、その子がお菓子を食べ終わるのを待つて、そう言ったんだ。途中でお菓子を取り上げたら可哀想だろ？ だから、最後まで食べ終わるのを待つて。そうしたら、その子、何て言ったと思う？」

『ごめんね。きたない？』

って、恥ずかしそうに、おれに訊くんだ。 おれはどう応えてやれば良かったんだ？ 何て言うてやれば良かったんだ？ おれが苦笑いをする、その子は自分で服を脱ぎ始めたよ。不器用でさ。ボタンもうまく外せなきゃ、袖もうまく抜けないんだ。 でも、そんなことは関係ない。その子は、おれに憫れ^{あわ}みを受けている、って知りながら、それを屈辱とも思わずに、汚い格好でいちゃいけない、と思つて、素直に風呂に入ると言ったんだ。強い子なんだよ……。 おれは、服を脱ぐのを手伝つてやろうと思つたけど、ついに最後まで手が出せなかった。それが悔しくて、情けなくて……。 だから、風呂では必ず、体を洗うのを手伝つてやろう、って決めて、汚れた服を洗濯機に放り込んで、その子を風呂に入れてやったんだ。その子は、バス・ルームでも珍しそうにキョロキョロとしていたよ。これが風呂だとは信じられない、って顔でさ。 おれは優越感を感じたよ。その子が珍しそうに辺りを見回し、おれに何かを言う度に、優越感を感じていたんだ。 そんな小さい子供を相手に……。 だから、おれ、その自分の心をごまかすために、その子に話しかけてやった。 おれは優しい善人なんだ、って顔でさ。

『家では、いつもお母さんと一緒に入るのかい？』

って。そうしたらその子は困ったように曖昧に笑って、ただ首を横に振ったよ。家族のことは話したがらないんだ。おれとは大違いだよ。おれは小さい頃から両親が自慢で、家柄が自慢で、その話をするのが嫌だ、って思ったことなんか一度もなかった。でも、その子は母親を嫌っていた訳じゃないんだ。母親をかばっていたんだ。おれに悪口を言われないように。小さくても、男は男なんだよな。ちゃんと女をかばうんだ……」

一呼吸おき、ビルはウイスキーを喉に流し込んだ。その手の中には、涙を拭いたハンカチがある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5935z/>

帰去来

2011年12月25日16時46分発行